

# 生命尊重概念の萌芽をめざす「乳」を活用した 食に関わる教育活動の意義と可能性

—幼児・学童期をつなぐアプローチ・スタートカリキュラムに着目して—

東京家政学院大学現代生活学部 准教授：酒井 治子

## I. 研究成果の概要

本研究の目的は、幼児・学童期における食に関わるプログラム開発にむけ、第1段階として、生命尊重概念の萌芽をめざす「乳」を活用した食に関わる教育活動の意義と可能性を、幼児・学童期をつなぐアプローチ・スタートカリキュラム（保育所・幼稚園と小学校教育との連続性の保証）に着目して検討をすすめた。

### 研究1) 幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校学習指導要領における「牛・やぎ・人」及びその「乳」に関する教育の内容分析

保育所・幼稚園と小学校をつなぐカリキュラムに着目した食に関わる教育活動の基礎資料として、「牛・やぎ・人」及びその「乳」に関する幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校学習指導要領での教育の「取り扱い」の系統性を分析した。

その結果、教育基本法、学校教育法を踏まえて、幼稚園教育要領では「生命の尊さに気付く」、保育所保育指針では「生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」等が教育の内容に位置づいていた。さらに、小学校指導要領「生活」では、「生命をもっていることや成長していることに気付き、いきものへの親しみをもち、大切にすることができるようにする」、小学校学習指導要領「道徳」においても「(1)生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする」等、生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述は、乳幼児教育から小学校教育へ系統的なつながりを持っている事がわかった。このように、生命尊重概念の萌芽・育成に関して、乳幼児教育から小学校教育への教育のねらいの連続性と整合性は確保されていると考えられる。しかし、内容の取扱いに当たっては、幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校指導要領において酪農体験が具体化されているものはほとんど見られなかった。唯一、「保育所における食育に関する指針」に示された5領域「いのちの育ちと食」において「ねらい②栽培、飼育、食事などを通して、身近な存在に親しみをもち、すべてのいのちを大切にする心を持つ」、「内容⑦卵や乳など、身近な動物からの恵みに、感謝の気持ちを持つ」、「配慮事項②身近な動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみ、いのちを育む自然の摂理の偉大さに畏敬の念を持ち、いのちを大切にすること」の記述が見られ、「乳」に関わる活動が具体的に提案されていたが、酪農体験等、食物の生産段階での活動に十分な焦点が当たっているとはいえなかった。

## 研究2) 教材分析：乳を題材とした絵本の分析-生命尊重概念の萌芽の育成に向けて-

平成25年6月、東京都内で絵本の所蔵冊数が最も多い白梅学園大学図書館にて、2010年1月1日に出版され、2013年5月28日までに所蔵している日本語で表記された絵本1261冊の中から調査日に貸し出しされていた121冊を除く、1140冊を分析対象に、教材性、すなわち、「牛・やぎ・人」及び「乳」の教材としての活用と、生命尊重概念の萌芽の観点に着目した「ねらい」や、子どもの活動や表現された文脈を検討した。

その結果、市販の絵本では、乳の生産（飼育、搾乳、授乳）、加工、消費（摂食）の各々の段階が単独、あるいは、複数の段階が組み合わせて描写されていたが、一連の流れが描写されている絵本は極めて少なかった。そのため、大人（保育者や親）が絵本の読み聞かせをする時、飼育から加工・消費までを橋渡ししながら働きかけることにより、一つ一つのシーンを繋ぎ、生命尊重概念の萌芽に繋げていくことができると考えられた。幼児・学童期における乳を題材とした食育プログラムの教材として、市販の絵本は飼育・授乳・搾乳・加工の体験の少ない子どもにとって、身近で疑似体験ができるという効果はみられたが、市販の絵本そのものが少なく限界があること、また、生命尊重概念の萌芽のためには保護者や保育者が生産から消費までの過程をつなぐ教育的意図が不可欠であること、実体験の必要性も示唆された。

## 研究3) 生命尊重概念の萌芽をめぐる教育的な意図、そのための「牛・やぎ・人」及び「乳」の教材としての意義や活用への積極性—保育士・小学校教諭対象のグループインタビューから—

東京都、群馬県2か所の保育士・小学校教諭、約10名を対象に、1時間半程度のグループインタビューを行い、子どもの生命尊重概念に対する指導観、「乳」の教材としての意義や活用への積極性に対する意識や考えを質的に分析し、生命尊重概念の萌芽・育成を目指す「乳」を活用したプログラムの意義や可能性及び要素を検討した。

その結果、①生命尊重概念の萌芽・育成やその場面の実態をどのようにとらえているかについて、保育士は、野菜や花壇の花の栽培、昆虫の飼育、日々の生活体験といった様々な体験を伴う活動の生き物の「成長」や「生」と「死」に直面する体験により、子どもの生命尊重概念を萌芽・育成させていけると考えていた。具体的には、みんなで死を考える、保育士が生命を大切にする姿を子どもに見せるという援助から、子どもに生命の大切さを思考させようとする等、保育士が寄り添った言葉がけによる関わりが非常に重要であるととらえていることが示唆された。

一方、小学校教諭は、生活科、理科といった体験を伴う学習活動や、道徳の授業等で子どもに生活体験を振り返らせたり気持ちを表出させたりして思考させることにより、子どもが生命尊重概念を萌芽・拡大していけると考えていた。しかし、子どもの生物の生死のとらえやその意識に戸惑いを感じている教師の思いも抽出できた。生命尊重概念を萌芽・育成する上で、子どもが体験した「生」や「死」、子どもが抱いた「生物への愛着」、「うれしさ」や「悲しみ」を振り返らせ生命尊重について思考させる指導や活動が必要であることが明らかになった。

②食と生命尊重概念との関連をどのように捉えているかについて、保育士は子どもが植物（野菜や山菜、米や果物など）や動物（魚や鶏など）と関わる活動や食事をす

る活動が植物や動物を食べ物として認識させるチャンスと捉えていることがうかがえた。さらに、これらの体験とそれを補完する指導・援助（言葉がけ）によって、「命をいただいて食べているということ」を子どもがとらえることができていると感じている保育士の発言が抽出できた。保育の現場では、食を通した生命尊重概念の萌芽・育成を図る体験やそれを支える保育観が環境として備わっていることが示唆される。

一方、小学校では、食の意味や大切さ、命のつながりについて、教科等（家庭科、理科、道徳）の学習の一部として扱っている。その中で食と動植物の生命とのつながりを捉えさせるには、現場教師はゲストティーチャーや絵本などを活用して学習と食を関連づける視点をもち意図的な働きかけを行っていく必要があるという認識をもっていることが分かった。小学校は生命と食とのつながりに関する学習が各教科等で断片的な扱いになっている現状もあり、各教科等の総合的なアプローチ、つまり総合的な学習における探究学習の中に位置付けていくことが必要であると考えられた。

③「乳」を教材として活用する意義をどのようにとらえ、「乳」活用への積極性が見られるかについて、保育士は栽培・収穫等の活動以上に、生命との関連、生命尊重の萌芽・育成を図る方略としての価値が見いだせないでいること、他の体験的活動により十分に生命尊重概念の萌芽が図れているという実態も関係しており、「乳」の活用への積極性はあまり見られなかった。逆を言えば、「乳」の活用は、現場サイドでは新たな視点になり得るため、意義やプログラムの価値を提案するにより、生命尊重概念の萌芽・育成に関する現場の指導・援助を拡大することが期待できる。

一方、小学校の実情として、生命尊重に関してはすでに道徳の位置づけが明確であるため、「乳」を学習教材として活用する余地があまりないことがうかがえる。したがって、「乳」活用の意義を、「子どもへの愛情」、「命をつなぐための食」、また、「母乳との関連」にも価値を見だし、それを思考・考察させる「概念化」という指導方略等、プログラムと共に、教員間で指導観を共有できるよう仕組みも提案する必要があることが明らかになった。

以上の検討の結果、生命尊重概念の萌芽・育成を図る「乳」を活用したプログラムは、乳幼児期、学童期の教育・保育現場サイドにおいては新たな視点である。そこで、研究1の結果が示すように、教育のねらいと内容を、乳幼児期では「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域を総合した活動として、学童期においては他の教科のねらいをつなげながら、補完しあう総合的な活動として構成していくことの重要性が明らかになった。また、その教材として、既存の絵本では網羅することはできず、部分的に活動しながら、乳の生産から消費段階までの一連の過程をつなぐ複合的な教材や環境の構成を開発していくことが必要であることが示唆された。そのためにも、保育士や教員等の教育者がその意義を共有し、指導観を育てることができる戦略、そして、「体験活動」から「振り返り（省察）」、「振り返り（省察）」から「概念化」、「概念化」から「実践」としたプログラム（サイクル）モデルを推進していく体制づくりを含めて提案していく必要性が明らかになった。特に、幼児・学童期をつなぐアプローチ・スタートカリキュラムに着目して、それぞれの場のカリキュラムの段差を考慮するために具体的な方策も提案していく必要性が明らかになった。

今後、本研究でその必要性が明らかになった「乳」を活用した生命尊重概念の萌芽・

育成を図るプログラム（サイクル）モデルの具体的方策や体制づくりを検討するとともに、なぜこのモデルを導入する必要があるのか、現場サイドがその価値を十分認識できるよう、子どもたちの成長から質的・実証的に検証していく必要があるだろう。それは、取りも直さず、「乳」を導入した発見的・探究的な活動による学びと生命尊重概念の萌芽・拡大が、人として成長するための「生きて働く力」となるという状況主義的価値の具体的な検証に他ならないと言えよう。

研究分野：基礎的研究、

キーワード：食育、アプローチ・スタートカリキュラム、生命尊重概念の萌芽

## II. 研究開始当初の背景

近年、食環境の変化に伴い、子どもの食生活への影響が危惧される中、「食を営む力」の育成に向け、その基礎を培う食育を乳幼児期から学童期、そして以降を含めて、間断なく展開することが期待されている<sup>1)</sup>。

酒井・林らは食育基本法(2005)の公布に先駆け、「保育所における食育に関する指針(厚生労働省2004)」の策定に関わり、食育のねらいと内容を、食と子どもの発達の観点から「食と健康」「食と人間関係」「食と文化」「いのちの育ちと食」「料理と食」の領域から捉えることの重要性を提案してきた。その中で、本研究と関連性が高い項目である「いのちの育ちと食」の領域では、身近な動植物に触れ合い、栽培・収穫、それを食することが、生命を尊重する心を育成する場としての必要性を強調している。保育実践の場でも、生命尊重と関連付けて食に関する教育活動を行っている例は少なくないが、科学的根拠を伴った研究はほとんどみられない。

生命を尊重する心の育成が求められる背景には、今日、いじめや自殺、小学生による殺人事件など、生命に関わる子どもの問題行動がある。嶋野道弘(2005)は、「今、社会が大きく変化し、子どもを取り巻く環境が変わり、子どもの本能的なとらえ方も変化している。これからの教育において、『生命尊重の心をはぐくむ教育』は、教育課程全体を通して、意図的・計画的・積極的に行う必要がある。…(中略)…それは喫緊の課題である。」<sup>2)</sup>と述べている。このような現状等を踏まえ、2006年には教育基本法が改定され、その第2条(教育の目標)の第4項に「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」と規定された。第2条第4項の内容は、道徳の学習指導要領に既に目標として記されていた内容であった。従来から、道徳の一目録であった生命尊重の態度の育成が、教育基本法に位置付けられたことは、異例と称されるように、生命尊重の態度の育成が緊急かつ重要な課題であり、同時に、乳幼児から学童期での今日の教育課程において重要視されている問題であるといえる。

ところで、子どもは生命というものをどのように認知していくのであろうか。認知発達研究において、動物との関わりや飼育が、幼児の知力・活動力・社会性・共感性等にプラスの影響を及ぼすことが明らかとなっている(Kellert & Felthous<sup>3)</sup>)。また、日本においても、植物や動物の生物概念、生と死の生命概念の発達に関する研究が進められている(稲垣・波多野<sup>4)</sup>)。幼児が5歳ぐらいまでには少なくとも栄養摂取や成長という観点から、生物と無生物とを区別するようになることを示している。また、生物と無生物の区別という「生きもの」の認識(属性としての生命)と、「生きている」という状態の認識(状態としての生命)とを明確に区別していないことも明らかになっている<sup>5)</sup>。しかしながら、生命を尊重する心が発達に関する研究は数少ない。

本研究が焦点をあてる「乳」は牛乳として子どもがほぼ毎日摂取し、消費段階での接点は多いものの、牛や山羊などを飼育し、搾乳する等の生産段階での接点は少ない。「乳」は肉や魚とは異なり命を奪わずに手に入る食べ物であるため、子供たちに命の大切さを伝えることが難しい可能性もある。前述のように、幼児でも成長の概念を持てるならば、哺乳動物であるヒトを比較対象に捉えて、牛とその分泌物である「乳」

を成長のために必要なものとして認識させることで、生命尊重の概念の萌芽に関連付けることができる可能性があるだろう。

そこで、本研究の目的は、幼児・学童期における食に関わるプログラム開発にむけ、第1段階として、生命尊重概念の萌芽をめざす「乳」を活用した食に関わる教育活動の意義と可能性を、幼児・学童期をつなぐアプローチ・スタートカリキュラム（保育所・幼稚園と小学校教育との連続性の保証）に着目して検討をすすめる。

具体的には次のプロセスで研究を進めた。

- 研究1) 教育内容分析：保育所・幼稚園と小学校をつなぐカリキュラムに着目した食に関わる教育活動の基礎資料として、「牛・やぎ・人」及びその「乳」に関する幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校学習指導要領での教育の「取り扱い」の系統性を分析する。
- 研究2) 教材分析：白梅学園大学図書館の絵本・紙芝居（国内）を対象に、教材性、すなわち、「牛・やぎ・人」及びその「乳」の教材としての活用と、生命尊重概念の萌芽の観点に着目した「ねらい」、展開される子どもの活動や表現された文脈を明らかにする。
- 研究3) グループインタビュー：関東地区2か所の保育士・小学校教諭、各10名程度を対象に、1時間半程度のグループインタビューを行い、生命尊重概念の萌芽をめぐる教育的な意図、そのための「牛・やぎ・人」及び「乳」の教材としての意義や活用への積極性を調査する。

#### 【文献】

- 1) 嶋野道弘監修：生命尊重の心をはぐくむ・「いのち」の実感を深める全教育活動・低学年，東洋館出版，2005，p.1
- 2) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説生活編，日本文教出版，2008，pp.34-35
- 3) Kellert, Stephen R. and Alan R. Felthous. 1985. Childhood Cruelty toward Animals among Criminals and Non-Criminals. Human Relations 38(12): 1113-1129
- 4) 稲垣佳世子，波多野誼余夫：こどもの概念発達と変化，日本認知科学会編，2005，211-20
- 5) 布施光代・郷式徹・平沼博将，幼児における生物と生命に対する認識の発達，心理科学，26, 56-66, 2006

### III. 幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校学習指導要領における「牛・やぎ・人」及びその「乳」に関する教育の内容分析

#### 1) 目的

本報の目的は、幼児・学童期における食に関わるプログラム開発にむけ、第1段階として、生命尊重概念の萌芽・育成をめざす「乳」を活用した食に関わる教育活動の意義と可能性を、検討をすすめることである。

#### 2) 研究の方法

平成20年6月に改正された小学校学習指導要領の全科、平成20年3月に告示された保育所保育指針、幼稚園教育要領において、生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述を抜粋し、乳幼児教育から小学校教育までの生命尊重概念に関わる取扱いについて比較し、教育の整合性について検討する。

### 3) 研究成果

#### (1) 教育基本法と学習指導要領の目標における生命尊重概念の位置づけ

小学校学習指導要領及び幼稚園教育要領は平成18年12月に公布された改正教育基本法、そして保育所保育指針の分析にあたって、その基盤となる教育基本法と学習指導要領における生命尊重概念の記述をみてる。

教育基本法では、目標の4点目に、平成18年12月に教育基本法が約60年ぶりに改正され、21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成を目指すという観点から、これからの教育の新しい理念が定められた。従来から規定されていた個人の価値の尊重、正義と責任などに加え、新たに、公共の精神、生命や自然を尊重する態度、伝統や文化を尊重し、我が国と郷土を愛するとともに、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うことなど(表I-1-三~五)が規定された。これにより、知・徳・体の調和のとれた発達(一)を基本としつつ、個人の自立(二)、他者や社会との関係(三)、自然や環境との関係(四)、日本の伝統や文化を基盤として国際社会を生きる日本人(五)という観点から具体的な教育の目標が定められ、「生きる力」の育成に向けて、生命尊重の態度の育成が一つの鍵となった。

これを受けて、学校教育法の学校教育の目標においても、第21条の二に「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと(表I-2)」が設けられている。

表I-1 教育基本法の教育の目標における生命尊重概念の位置づけ

(教育の目標) 第二条	<ul style="list-style-type: none"> <li>一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。</li> <li>二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。</li> <li>三 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。</li> <li><b>四 生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うこと。</b></li> <li>五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。</li> </ul>
----------------	--

表I-2 学校教育法の学校教育の目標における生命尊重概念の位置づけ

(学校教育の目標) 第二十一条	<ul style="list-style-type: none"> <li>一 学校内外における社会的活動を促進し、自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。</li> <li><b>二 学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと。</b></li> <li>三 我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。</li> <li>四 家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業その他の事項について基礎的な理解と技能を養うこと。</li> <li>五 読書に親しませ、生活に必要な国語を正しく理解し、使用する基礎的な能力を養うこと。</li> <li>六 生活に必要な数量的な関係を正しく理解し、処理する基礎的な能力を養うこと。</li> <li>七 生活にかかわる自然現象について、観察及び実験を通じて、科学的に理解し、処理する基礎的な能力を養うこと。</li> <li>八 健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣を養うとともに、運動を通じて体力を養</li> </ul>
--------------------	--

	い、心身の調和的発達を図ること。
九	生活を明るく豊かにする音楽、美術、文芸その他の芸術について基礎的な理解と技能を養うこと。
十	職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと。

## (2) 「幼稚園教育要領」における生命尊重概念の位置づけ

幼稚園教育要領をみると、幼稚園における教育の目標には「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の観点から、5つの項目が設定されている。その三点目に「身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと」が位置づいている。

生命尊重概念の萌芽・育成に関わる項目について抽出していくと、保育内容、領域「環境」の中で、ねらい「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で事象に興味や関心を持つ」、内容「(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」が該当する。

表 I - 3 学校教育法の幼稚園における教育の目標

幼稚園における教育の目標 第二十三条	一	健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること。
	二	集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと。
	三	<u>身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと。</u>
	四	日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと。
	五	音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと。

表 I - 4 幼稚園教育要領における生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述

領域	ねらい	内容	内容の取扱い
環境	身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で事象に興味や関心を持つ。	身近な動植物に親しみをもって接し、 <u>生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。</u>	<u>身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。</u>

## (3) 「保育所保育指針」及び「保育所における食育に関する指針」における生命尊重概念の位置づけ

保育所保育指針においても、保育の目標に、「エ）生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと」が設定されている。また、幼稚園教育要領と同様、保育内容・環境の中で、ねらい「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で事象に興味や関心を持つ」、内容「⑦ 身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く」に、生命尊重概念の萌芽に関する記述がみられた。

一方、「保育所における食育に関する指針」では、食と子どもの発達の観点から「食と健康」「食と人間関係」「食と文化」「いのちの育ちと食」「料理と食」の領域か

ら捉えることの重要性を提案してきた。その中で、「いのちの育ちと食」において「ねらい②栽培、飼育、食事などを通して、身近な存在に親しみをもち、すべてのいのちを大切にすることをもち、」、「内容⑦卵や乳など、身近な動物からの恵みに、感謝の気持ちを持つ。」、「配慮事項②身近な動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみ、いのちを育む自然の摂理の偉大さに畏敬の念をもち、いのちを大切にすることをもち、」の記述が見られ、「乳」に関わる活動が具体的に提案されている。

表 I - 5 保育所における子どもの保育の目標

保育所の保育の目標	<p>(ア)十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。</p> <p>(イ)健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと。</p> <p>(ウ)人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にする心を育てるとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。</p> <p><b>(エ)生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。</b></p> <p>(オ)生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと。</p> <p>(カ)様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと。</p>
-----------	---

表 I - 6 保育所保育指針における生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述

領域	ねらい	内容
環境	身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で事象に興味や関心を持つ。	⑦身近な動植物に親しみをもち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く。

表 I - 7 「保育所における食育に関する指針」で示す領域「いのちの育ちと食」における生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述

ねらい	内容	配慮事項
<p>①自然の恵みと働くことの大切さを知り、感謝の気持ちを持って食事を味わう。</p> <p>②栽培、飼育、食事などを通して、身近な存在に親しみをもち、すべてのいのちを大切にすることをもち、</p>	<p>①身近な動植物に関心を持つ。</p> <p>②動植物に触れ合うことで、いのちの美しさ、不思議さなどに気づく。</p> <p>③自分たちで野菜を育てる。</p> <p>④収穫の時期に気づく。</p> <p>⑤自分たちで育てた野菜を食べる。</p> <p>⑥小動物を飼い、世話をする。</p>	<p>①幼児期において自然のもつ意味は大きく、その美しさ、不思議さ、恵みなどに直接触れる体験を通して、いのちの大切に気づくことを踏まえ、子どもが自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること。</p> <p>②<b>身近な動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみ、いのちを育む自然の摂理の偉大さに畏敬の念をもち、いのちを大切にすることをもち、</b></p> <p>③飼育・栽培に関しては、日常生活の中で子ども自身が生活の一部として捉え、体験できるように環境を整えること。また、大人の仕事の意味が分かり、手伝いなどを通して、子どもが積極的に取り組めるように配慮すること。</p>

③身近な自然にかかわり、世話をしたりする中で、料理との関係を考え、食材に対する感覚を豊かにする。	⑦ <u>卵や乳など、身近な動物からの恵みに、感謝の気持ちを持つ。</u> ⑧食べ物を皆で分け、食べる喜びを味わう。	④身近な動植物、また飼育・栽培物の中から保健・安全面に留意しつつ、食材につながるものを選び、積極的に食する体験を通して、自然と食事、いのちと食事のつながりに気づくように配慮すること。 ⑤小動物の飼育に当たってはアレルギー症状などを悪化させないように十分な配慮をすること。
--	---	--

#### (4) 小学校学習指導要領における生命尊重概念の位置づけ

小学校学習指導要領の全科において、生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述を抜粋した。第1章「総則」、第2章「各教科」の第1節「国語」、第4節「理科」、第5節「生活」及び第3章「道徳」に見られる（表1-1、表1-2、表1-3、表1-4、表1-5）。

表 I - 8 第1章総則における生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述

第1の2	・人間尊重の精神と <u>生命に対する畏敬の念</u> を家庭・学校・その他の社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の騒動を凶るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するための基盤として道徳性を養うことを目標とする。
------	--

表 I - 9 第2章第1節「国語」における生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述

第3 指導計画 の作成と 内容の取 り扱い	3 教材については、次の事項に留意するものとする。 (2) 教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。 カ <u>生命を尊重し</u> 、他人を思いやる心を育てるのに役立つこと。 キ <u>自然を愛し</u> 、美しいものに感動する心を育てるのに役立つこと。
-----------------------------------	---

表 I - 10 第2章第4節「理科」における生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述

第2 第3学年 1目標	(2)身近にみられる動物や植物、日なたと日陰の地面を比較しながら調べ、見いだした問題を興味・関心をもって追及する活動を通して、 <u>生物を愛護する態度を育てる</u> とともに、生物の生長のきまりや体のづくり、生物の環境とのかかわり、太陽と地面の様子との関係についての見方や考え方を養う。
第2 第4学年 1目標	(2)人の体のづくり、動物の課都度や植物の成長、天気の様子、月や星の位置の変化を運動、季節、気温、時間など関係付けながら調べ、見いだした問題を興味・関心をもって追究する活動を通して、 <u>生物を愛護する態度を育てる</u> とともに、人の体のづくりと運動、動物の活動や植物の成長と環境とのかかわり、気象現象、月や星の動きについての見方や考え方を養う。
第2 第5学年 1目標	(2)植物の発芽から結実までの過程、動物の発生や成長、流水の様子、天気の変化を条件、時間、水量、自然災害などに目を向けながら調べ、見出した問題を計画的に研究する活動を通して、 <u>生命を尊重する態度を育てる</u> とともに、生命の連続性、流水の動き、気象現象の規則性についての見方や考え方を養う。
第2 第6学年 1目標	(2)生物の体のづくりと働き、生物と環境、土地のづくりと変化の様子、月と太陽の関係を推論しながら調べ、見いだした問題を計画的に追及する活動を通して、 <u>生命を尊重する態度を育てる</u> とともに、生物の体の働き、生物と環境とのかかわり、土地のづくりと変化のきまり、月の位置や特徴についての見方や考え方を養う。

表 I - 11 第2章第5節「生活」における生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述

第2 2内容	(7)動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に監視をもち、また、それらは <u>生命をもっていることや成長していることに気づき、いきものへの親しみをもち、大切にすることができるようにする。</u>
-----------	---

表 I - 12 第3章「道徳」における生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述

第2内容 第1学年及び 第2学年の3	(1)生きることを喜び、 <u>生命を大切に</u> する心をもつ。 (2)身近な自然に親しみ、 <u>動植物に優しい心で接する</u> 。
第2内容 第3学年及び 第4学年の3	(1) <u>生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切に</u> する。 (2)自然のすばらしさや不思議さに感動し、 <u>自然や動植物を大切に</u> する。
第2内容 第5学年及び 第6学年の3	(1)生命がかけがえのないものであることを知り、 <u>自他の生命を尊重する</u> 。
第3指導計画 の作成と内容 の取扱いの1	(3)各学校においては、各学年を通じて自立心や自律性、 <u>自他の生命を尊重する心</u> を育てることに配慮するとともに、児童の発達の段階や特性などを踏まえ、指導内世の重点化を図ること。

#### (5) 学校給食の目標における生命尊重概念の位置づけ

学校給食法も、教育基本法の改正、及び、食育基本法の施行により平成20年に改正され、学校給食の目標の一つに「四 食生活が自然の恩恵の上に成り立つものであることについての理解を深め、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」の生命尊重概念の育成に関する事項が新たに加わった。学校給食が栄養の補給という意義と同様に、教育的視点がなお一層重視されたことになる。

表 I - 13 学校給食の目標における生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述

(学校給食の 目標) 第二条	一 適切な栄養の摂取による健康の保持増進を図ること。 二 日常生活における食事について正しい理解を深め、健全な食生活を営むことができる判断力を培い、及び望ましい食習慣を養うこと。 三 学校生活を豊かにし、明るい社交性及び協同の精神を養うこと。 <b>四 <u>食生活が自然の恩恵の上に成り立つものであることについての理解を深め、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと。</u></b> 五 食生活が食にかかわる人々の様々な活動に支えられていることについての理解を深め、勤労を重んずる態度を養うこと。 六 我が国や各地域の優れた伝統的な食文化についての理解を深めること。 七 食料の生産、流通及び消費について、正しい理解に導くこと。
----------------------	---

#### 4) まとめ

幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校指導要領全科において生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述を抽出した結果、幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校指導要領「国語」「理科」「生活」「道徳」においてすべてに記述が認められた。幼稚園教育要領では「生命の尊さに気付く」、保育所保育指針では「生命の尊さに気付く、いたわったり、大切にしたりする」としており、小学校学習指導要領「生活」では、「生命をもっていることや成長していることに気付く、いきものへの親しみをもち、大切にすることができるようにする。」とし、小学校学習指導要領「道徳」においても「(1)生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。」としており、生命尊重概念の萌芽・育成に関わる記述は、乳幼児教育から小学校教育へ系統的なつながりを持っている事がわかる。これまで、幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校指導要領は平成20年3月に同年に改訂が告示され、それぞれの中で、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の為に相互に連携することが示されており、今回、抽出した幼稚

園教育要領、保育所保育指針、小学校指導要領の内容を合わせて鑑みると、生命尊重概念の萌芽・育成に関して、乳幼児教育から小学校教育への教育のねらいの連続性と整合性は確保されていると考えられる。しかし、内容の取扱いに当たっては、幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校指導要領において酪農体験が具体化されているものはほとんど見られなかった。唯一、「保育所における食育に関する指針」に示された5領域「いのちの育ちと食」において「ねらい②栽培、飼育、食事などを通して、身近な存在に親しみを持ち、すべてのいのちを大切にすることを心を持つ」、「内容⑦卵や乳など、身近な動物からの恵みに、感謝の気持ちを持つ」、「配慮事項②身近な動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみ、いのちを育む自然の摂理の偉大さに畏敬の念を持ち、いのちを大切にすることを心を持つ」の記述が見られ、「乳」に関わる活動が具体的に提案されている。

上記のように、教育基本法の改正以降、さまざまな法規において生命尊重概念の萌芽・育成に関する事項が盛り込まれ、教育現場においてもさまざまな教科で題材として取り入れられてきている。同時に、乳幼児教育から小学校教育への生命尊重概念の萌芽・育成に関する学びの連続性を保障する体制も認められた。しかしながら、具体的な教育的な活動になると、生命尊重概念の萌芽・育成のための活動とし、「乳」、特に酪農体験等が十分に位置づいていないことが明らかとなった。

「乳」は、哺乳動物である人間にとって、この世に生を受けてすぐに始まる食の営みのスタートであるが、成長するに従い、摂食行動も哺乳から離乳へと進み、自らが哺乳動物であるという意識が低くなっていると考えられる。そのため、本来ならば「乳」は身近な存在であるにも関わらず、哺乳としての「乳」が遠いものとなっている。しかし、幼稚園、保育所、小学校等の給食において、多くの場面で子ども達は毎日のように摂取しており、食品としての「乳」の存在は近いと言える。本来のヒトの摂食行動の原点であり、日常生活での摂取頻度の高い「乳」を教材として生かせるような、乳幼児教育から小学校教育への体制作りが必要であることが示唆された。

## IV. 乳を題材とした絵本の分析—生命尊重概念の萌芽の育成に向けて—

### 1) 研究の目的

幼児・学童期における乳を題材とした食育プログラムの開発にむけて、こども及び保護者・教育者にとって最も身近な絵本の教材の有効性を検討するために、現在市販されている絵本を対象に、生産（飼育）、搾乳、授乳、加工、消費(摂食)の描写状況の分析を行った。

### 2) 研究の方法

東京都内で絵本の所蔵冊数が最も多い白梅学園大学図書館において、平成25年6月

に調査を行った。対象とした絵本は、2010年1月1日以降に出版され、2013年5月28日現在までに所蔵している日本語で表記された絵本1261冊の中から調査日に貸し出しされていた121冊を除く、1140冊を分析対象とした（日本の本718冊、外国の本421冊、不明1冊）。乳の種類は五訂食品成分表に準じて、ウシ、ヤギを題材対象とした。

### 3) 研究成果

#### (1) ウシヤギの絵が抽出された絵本の出現頻度

1140冊のうち、ウシヤギの絵が出現した絵本は101冊（8.9%）であった（図2-1）。その101冊の内容としては、飼育場面(27冊)、搾乳場面(3冊)、授乳場面(2冊)、パッケージや食器での描写されたウシの絵など(69冊)がみられた。

次に、飼育場面（27冊）についてみると（図2-2）、ウシヤギが牧場にいる（9冊）、ウシヤギが草を食べている（7冊）、ウシヤギが小屋にいる（7冊）、人がウシを引っ張っているなど(4冊)でした。飼育場面から、ウシの生存や草を食べて生きていることが伝わると考えられる。

具体的に、飼育場面の絵本をみると（図2-3）、草を食べている描写が登場し、ウシが草を食べて生きていることが伝わる。また、この絵本では、牛の飼育（乳の生産）や乳からバターへの加工が文章や絵から子供に伝えられていたが、消費（摂食）にまではつながっておらず、生産（飼育）、搾乳、授乳、加工、消費(摂食)の一連の流れに気づ

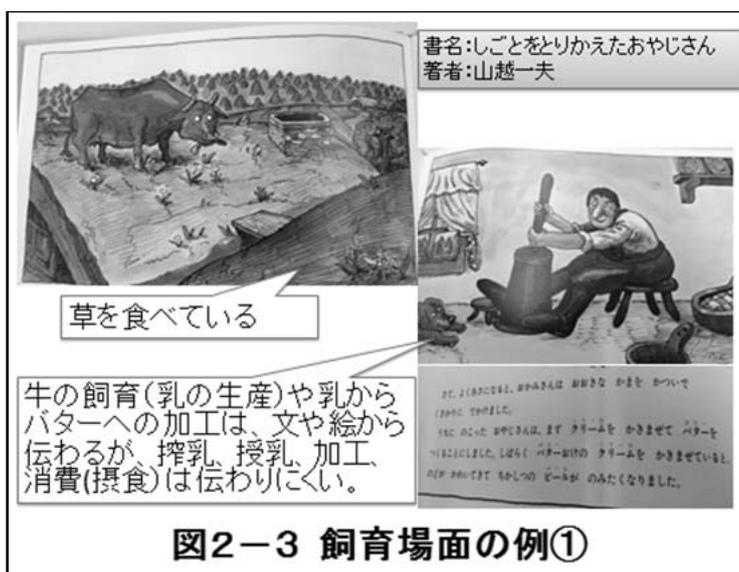
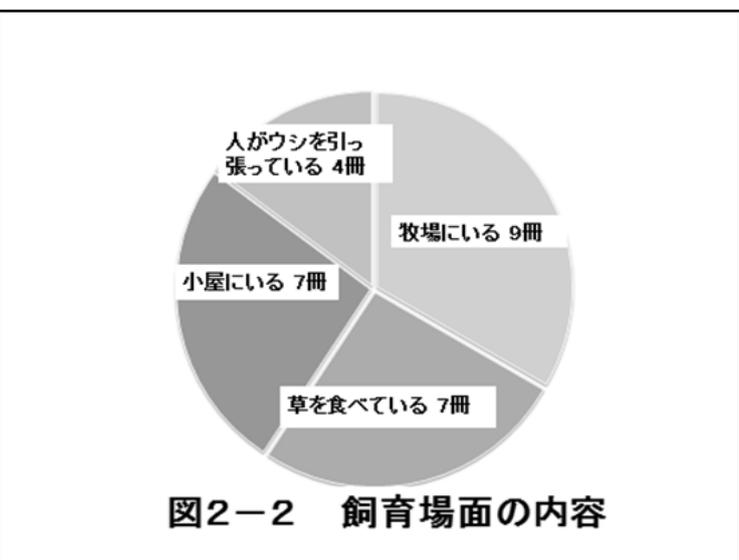
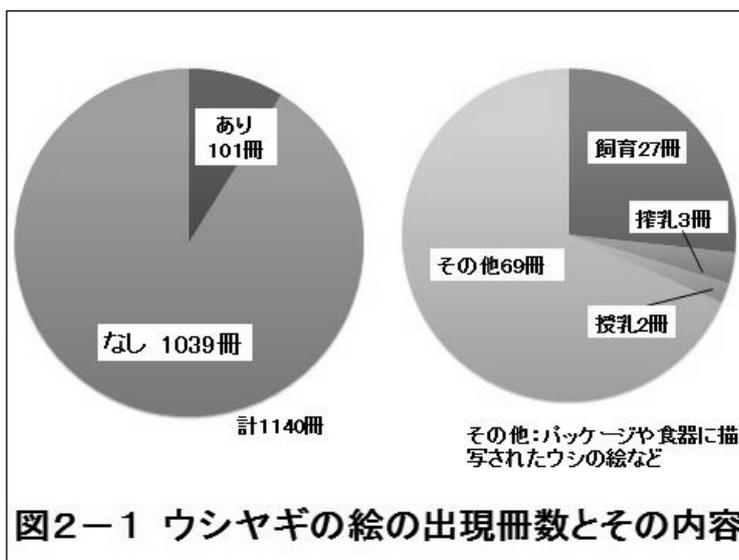


図2-3 飼育場面の例①

きにくいと考えられた。

飼育場面で最も多かったのは、牛が牧場にいる絵本であり、9冊であった(図2-4)。風景の一部として描写されており、搾乳、授乳、加工、消費(摂食)の流れは描かれていなかった。しかし、人と共に出現しており、人が乳を飲むために飼育していることが伝わると考えられた。右のウシを引いている絵本では、ウシ飼いに引かれている場面が描写されており、人が物を運ぶためにウシを飼っていることが伝わる。どちらも人と共に出現しているため、人がウシを飼う理由を読み聞かせの時に話すきっかけになるのではないかと考えられた。

その他に、小屋に入っている(図2-5)描写もみられ、図2-4の牧場にいる、ウシを引いていると同様に、人がウシを家で飼っていた理由(乳を飲んでいたこと)を読み聞かせの時に話すきっかけになるのではないかと考えられた。

上記の飼育場面以外には、授乳が描写された絵本が2冊みられた(図2-6)。人の授乳場面のみではなく、ウシ以外にも様々な哺乳類の授乳場面を描写することにより、動物には命があり、自分の命も、他者の命も尊重して生きていることを伝えているのではないかと考えられた。今回は絵本の抽出の段階でウシ・ヤギの描写されている絵本を抽出したため、その段階で、ウシ・ヤギ以外の動物だけの授乳場面が描かれた絵本は抽出しなかった。従って、実際には、ウシ・ヤギ以外の動物の授乳場面が描かれた絵本は多く存在していることも予測された。



図2-4 飼育場面の例②



図2-5 飼育場面の例③



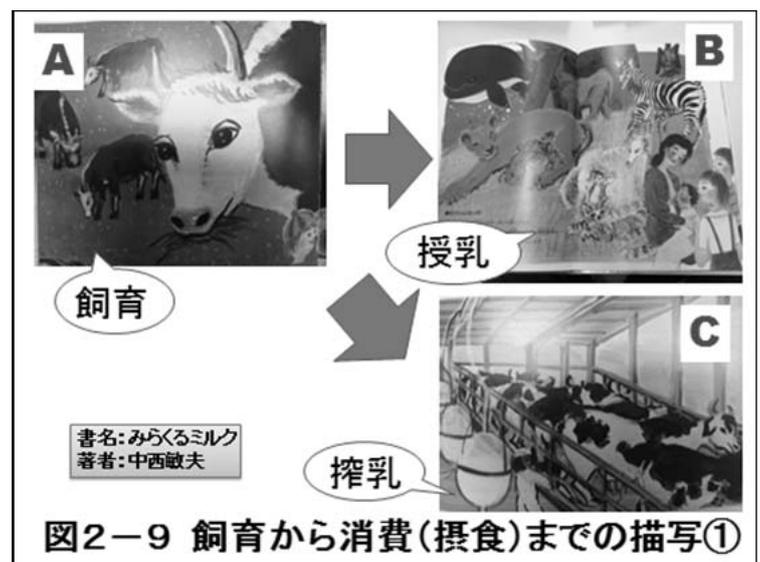
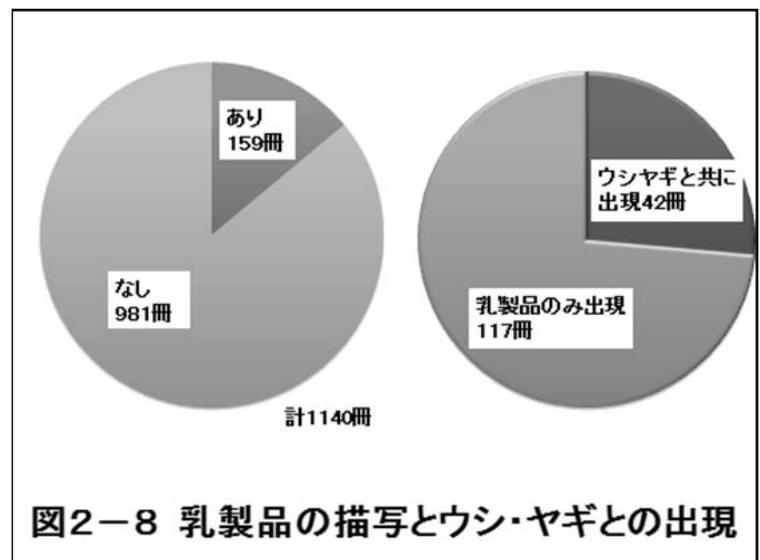
図2-6 授乳の描写

一方、搾乳が描写された絵本は3冊みられた(図2-7)。子ども、クマ、大人がウシから搾乳をしていた。左のクマが擬人化された絵本では、「いただきます」と「ごちそうさま」を言うことで、たくさんの命を頂くことの大切さや、感謝の気持ちを伝えていた。一方、右の絵本ではO-157の病気の予防のために、動物を触ったら手を洗うことを推奨していた。この2冊は乳製品の生産から消費の一連の過程を描写した絵本ではなかったが、絵の一部として搾乳場面が描写されることはウシ・ヤギを日常生活で見ることが少ない子どもにとって非常に貴重であると思われた。

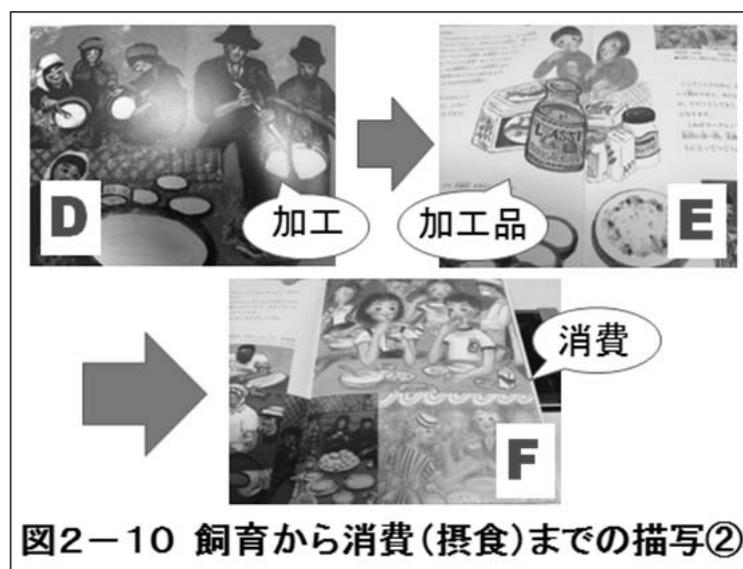
## (2) 乳製品の絵が抽出された絵本の出現頻度

乳製品の絵が描写された絵本は、1140冊のうち159冊(13.9%)であり、そのうち、ウシ・ヤギと共に出現した絵本は42冊であった。乳製品とウシ・ヤギと共に出現している絵本は言葉や数を学ぶことが目的とするものもみられた。また、ウシ・ヤギが風景の一部として描写され、乳製品が食卓に置かれ、摂食(消費)する場面も描かれていた。しかし、生産(飼育や搾乳、授乳)は描写されておらず、生産から消費までの一連の流れは気づきにくいと考えられた。

乳製品とウシ・ヤギが共に出現した1冊、生産から消費の流れが分かる「みらくるミルク」という絵本を紹介する。絵本のAのシーンは、絵本に登場する飼育場面である。ここ



では、乳を飲むためにウシを飼い始め、人間はウシを必要とし大切に育ててきたことや、ウシが草を食べることによって生きており、ミルクが作られることが伝えられていた。続いて、Bのシーンは哺乳動物や母親が授乳し、母親の乳を飲んで成長することが描かれており、ほかの動物の乳を頂くありがたさが伝わると考えられる。Cのシーンは搾乳の場面であり、牛の命があり、乳を分泌するため、人が乳をいただけることが伝わってくる。そのため、命の大切さが分かる場面である。



Dのシーンは人が乳を使って乳製品へと加工をしている場面も描写されていた。さらに、Eのシーンには出来上がった加工品が描かれていた。これらの場面では、ヨーグルト、バター、チーズなど様々なものが乳からできていることが伝えられていた。また、加工によって食品を日持ちさせる工夫を行っていることが記載されており、乳を大切に扱っているということが伝わってくる。最後に、Fのシーンは人が乳を加工した料理を食べている場面で、消費（摂食）する、乳をいただくありがたさが伝わると考えられた。

この絵本は科学絵本であり、乳幼児には難しい言葉や漢字が使われている。しかし、絵が豊富に描写されており、大人（保育者や親）がその場面を説明することにより、乳の生産から消費の流れを伝えることができるであろう。

#### 4) まとめ

以上のように、市販の絵本では、乳の生産（飼育、搾乳、授乳）、加工、消費（摂食）の各々の段階が単独、あるいは、複数の段階が組み合わせて描写されていたが、一連の流れが描写されている絵本は少なかった。そのため、大人（保育者や親）が絵本の読み聞かせをする時、飼育から加工・消費までを橋渡ししながら働きかけることにより、一つ一つのシーンを繋ぎ、生命尊重概念の萌芽に繋げていくことができると考えられた。幼児・学童期における乳を題材とした食育プログラムの教材として、市販の絵本は飼育・授乳・搾乳・加工の体験の少ない子どもにとって、身近で疑似体験ができるという効果はみられたが、市販の絵本そのものが少なく限界があること、また、生命尊重概念の萌芽のためには保護者や保育者が生産から消費までの過程をつなぐ教育的意図が不可欠であること、実体験の必要性も示唆された。

## V. 生命尊重概念の萌芽をめぐる教育的な意図、そのための「牛・やぎ・人」及び「乳」の教材としての意義や活用への積極性—保育士・小学校教諭対象のグループインタビューから—

### 1) 研究の目的

保育士と小学校教諭を対象としたグループインタビュー調査を行い、子どもの生命尊重概念に対する指導観、「乳」の教材としての意義や活用への積極性に対する意識や考えを質的に分析し、生命尊重概念の萌芽・育成を目指す「乳」を活用したプログラムの意義や可能性及び要素を検討する。

### 2) 研究の方法

#### (1) 調査対象及び調査時期

命の教育に関心の高い保育士が集まる保育所A園、B園を抽出し、調査に協力の得られた保育士等を対象に、それぞれの園でグループインタビュー調査を実施した。また、C県、D県において命の教育に関心の高い小学校教諭を抽出し、調査に協力の得られた教諭等を対象とし、それぞれの県単位でグループインタビュー調査を実施した。グループインタビュー調査実施日と対象の基礎的データを表2-1に示す。

表3-1 調査時期及び対象の基礎的データ

調査No.	調査実施日	対象及び人数		対象の勤務経験年数	
				10年未満	10年以上
1 : A園	2014年 2月	保育士	5	3	2
		園長	1	0	1
		調理師	1	1	0
2 : B園	2013年 7月	保育士	9	4	5
		栄養士	1	0	1
3 : C県	2013年 8月	教諭	5	0	5
		指導主事	1	0	1
		スクールカウンセラー (校長経験者)	1	0	1
4 : D県	2013年 8月	教諭	6	3	3
		校長	1	0	1

#### (2) 調査及び分析方法

グループインタビュー調査を実施するにあたり、研究目的を踏まえ質問の観点を設定した(表2-2)。調査は、研究者による司会1名と司会補助1名が質問の観点(表2-2)を踏まえ、対話の流れの中で質問を行った。また司会や司会補助は、対象者同士が相互に考えを述べ合ったり反論したりすることは妨げず、積極的な意見交換を促した。

インタビューでの発話をICレコーダーで記録し、その音声データをもとに発話プロトコルを起こし、子どもの生命尊重概念の萌芽・育成につながる活動の教育的意図及び「乳」の教材としての意義や活用に対する意識や考えを抽出し解釈的分析を行う。

表 3-2 質問の観点と主な質問例

観 点	主 な 質 問 例
① 生命尊重概念の萌芽・育成やその場面の実態をどうとらえているか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんな保育・教育活動で子どもが生命を認識していると感じますか</li> <li>・生と死の認識、その実感のレベルについてどう感じていますか</li> <li>・生命尊重の心を育む具体的な指導や取組はどのようなものですか</li> <li>・具体的な教材はありますか</li> </ul>
② 食と生命尊重概念との関連をどうとらえているか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日々の活動の中で食と命の教育を関連付けてどのように指導していますか</li> <li>・その他、具体的な取組や教材はありますか</li> </ul>
③ 「乳」を教材として活用する意義をどうとらえ、「乳」活用への積極性が見られるか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生命尊重という視点で「乳」の教育的・教材的価値をどうとらえますか</li> <li>・保育・教育活動の中で生命尊重の視点で「乳」を教材として使用する場合、どのように活用できそうですか</li> </ul>

### 3) 研究成果

調査1と2、調査3と4で、発話内容に大きな差があるとは認められなかった。そこで、調査1と2を保育士群（α群）、調査3と4を小学校教諭群（β群）として発話事例を抽出し、両群の対象者の意識や考えの共通点や差異点に着目し解釈的に検討した。その結果、以下の項で示すように、生命尊重概念の萌芽・育成を目指す幼児・学童期における「乳」を活用した活動・学習プログラム開発の視点が抽出できた。

#### (1) 観点①についての結果と考察

α群における事例を事例1に示す。事例1から、保育士は、野菜や花壇の花の栽培、昆虫の飼育、日々の生活体験といった様々な体験を伴う活動により、子どもの生命尊重概念を萌芽・育成させていけると考えていると言える。特に、子どもは生き物の「成長」や「生」と「死」に直面する体験により生命尊重概念を萌芽させていくのではないかと保育士は考えていることがうかがえる。こうした体験を伴う活動において生命尊重概念を萌芽・育成するために、みんなで死を考える（1-a）、保育士が生命を大切にしている姿を子どもに見せる（1-d）という援助が抽出できた。この援助には、子どもに生命の大切さを思考させようとする意図があると考えられる。生命尊重概念を萌芽させるために、保育士が寄り添った言葉がけによる関わりが非常に重要であるととらえていると言える。

β群における事例を事例2に示す。事例2から、教師は、生活科、理科といった体験を伴う学習活動や道徳の授業により、子どもが生命尊重概念を萌芽・拡大していけると考えていると言える。特に道徳の授業では、教師4-cの発言にもあるように、子どもに生活体験を振り返らせたり気持ちを表出させたりして思考させることで、生命尊重概念が育成できると感じていることがうかがえる。

#### 事例1（α群）

1-a	命の大切さというのは、年長を持った時に生き物をみんなで育てて亡くなってしまった時に、どうして死んでしまったのかみんなで考えて、生きているものから命の大切さを感じたり、(後略)
1-d	夏には畑できゅうりやトマトを作ったり、庭で見つけたクワガタをこどもたちと一っしょに飼ってみたりとかは日々していて、大切にしているのは、まず大人が生き物を大切にしているという姿を見せるというのが大切かなと思っていて、(中略)そういうところから最初は命の大切さを学んでいくのかなと思うので、今の私はまずは自分がいきものを大切にそれを姿でみせて伝えていくことを大切にしていま

	す。(後略)
2-h	いろいろ個人差があると思うんですけど。先日年長の女の子がつばめの巣からつばめのひなが落ちちてしまって、(中略)、そのあと「つばめさんどうした？」って聞いたんですけど、「死んじゃったの」ってお話してくれて、すごくさみしそうな表情をして、すごくその死っているものに対して身をもって体験したのは、あの子は年長さんですけど、なんとなく漠然とは分かっていたのかもしれないけども、自分が一生懸命かわいがっていたひなが死んじゃったということで、もしかしたら身をもって体験したのかなっていうふうには思います。

注) 数字は調査No、アルファベットは対象者の別を示す。本表記は、以降の事例にも適用する。

## 事例2 (β群)

3-a	小学校で教えているときは2年生の生活科で野菜を作る。(中略)成長してって収穫ができる。まさにそんなことで命を感じるのでは(後略)
3-b	3年生だと、(中略)理科でモンシロチョウの卵から成虫まで孵すので、結構その中で命という言葉を出すことが多くて。一つの命だから最後まで責任もって育てようねと言って。そういうのを考えてほしいので、(中略)途中でだめになっても、それがまた命の大切さということを感じるきっかけになっていたのではないかと感じます。
4-c	(前略)死と向き合うことによって命を感じさせると言うのが意図的に道德の中ではやってきたなと思っています。心臓病。道德の中にそういう題材があるんですが、(中略)命は最後なくなってしまうんですが、母への感謝とかお友達への思いだとか、その資料がすごいので、それを見ながら子ども達が命を考える。自分が大事なものは何かを考えるっていうのは見つめさせる、意図的にやったことはあります。逆に死と向き合わせることで、命の大切さを考えさせるっていうのはやりました。(後略)
4-b	蚕を3年生の先生に渡して(中略)、いくつか孵して初めは「うわー気持ち悪い」とか言っているんですけど、だんだん黒い小さいのから白く大きくなってくると初めは気持ち悪がっていた子も撫でたりとか、名前付けたりとかして、(中略)最後のまとめをどうしたらいいのかすごく困ったんですけど、結局その繭玉を使ってなにか作品を作るとか、命をいただいて結局絹糸をとると言う学習をする中で結局は命をもらうんだと言う話をして泣いている子とかもいましたね。

しかし、子ども(2年生)の生物の生死のとらえやその意識に戸惑いを感じている教師の思いも抽出できた。事例3の教師4-fは、子どもは飼育している生き物について「生きてると楽しい」、「死んでしまうと怖いものや気持ち悪いもの」ととらえると感じている。子ども自身が育てたモンシロチョウが死んでしまった時の悲しみや生命の尊さを感じてほしいという教師の願いがあるが、子どもの実態は「死んでしまうと怖いものや気持ち悪いものになっている」「本当の命ではないよう」と感じ、「違うでしょ」とこの局面に対して指導として働きかけなければいけないと感じていると考えられる。これは、単に体験活動を行えば生命尊重概念を萌芽・育成できるとは限らないことを示唆していると言える。生命尊重概念を萌芽・育成する上で、子どもが体験した「生」や「死」、子どもが抱いた「生物への愛着」、「うれしさ」や「悲しみ」を振り返らせ生命尊重について思考させる指導や活動が必要であることを示唆していると考えられる。また、事例3の保育士2-hは、保育所においてこのような子どもの実態があった時に、言葉による働きかけを実践している。

## 事例3

2-h	小さな生き物が色々いるんですけども、子どもにとってはおもちゃ的な感じで、命があるけれども踏んでみたりとか、小さいところに閉じ込めて自分のものにしたいという
-----	---

	<p>気持ちで集めたりして、そのままにしたりするんですけども、<u>そういう時には「虫さんも痛かったよね」とかそういう関わりで、あと、(中略)「カブトムシさんもみんなと同じでおうちに帰りたいよね」とかっていうなるべく虫には虫の命があって、決しておもちゃではなくて、ちゃんと生きているんだということがなるべく伝わるような関わりを心がけています。</u></p>
4-f	<p>2年生で生活科で子ども達と虫を捕まえに行って、A先生とね。隣の憩いの森っていう大きな芝生のところにね。そこでバッタやら大量に。本当に大量に。でも、結局そこで捕まえることは楽しいし、<u>生きているからそれが楽しいんだけど、翌日とかちょっと時間がたって虫かごの中で1匹でも死んでいるのがあると、それは怖いものになり、気持ち悪いものになってる。え？違うよね、この間まで生きている時はみんな捕まえてたじゃん。(中略)2年生だとまだ所有する、自分が所有できているものとしてしか感じていなくて。結局命として大事にしたいというよりは、自分のものとして大事にしたい。そのところで、本当の命ではないような感覚はこの1学期間で思ったところです。</u></p>

事例1、2から、生命尊重概念の萌芽・育成には「体験活動」と「振り返り(省察)」、それを支える「言葉による働きかけ」という要素が重要であることが示唆されたと言える。

また、「生きているから楽しい」が「死んでしまうと怖いものや気持ち悪いものになっている」という子どもの実態は、生命尊重概念の萌芽・育成の体験を通して行う上で、無視できないものであると考える。「乳」を教材として使用した場合、命をいただく局面や死の局面に子どもが触れることがない。子どもに死に対する恐怖感を与えないという点で、「乳」の教材としての活用意義があると考えられる。

## (2) 観点②についての結果と考察

α群における事例を事例4に示す。事例4から、保育士は、子どもが植物(野菜や山菜、米や果物など)や動物(魚や鶏など)と関わる局面や食事をする局面が植物や動物を食べ物として認識させるチャンスととらえていることがうかがえる。例えば事例4の保育士2-cは、野菜の成長を観察する中で、子どもに「食べられるのはいつかな」、「給食にはいつか」と言葉をかけていると発言している。また、調理師2-dも子どもと接するとき「畑でとれた野菜をいれてるんだよ」と言葉をかけていると発言している。さらに、食と結びつく植物や動物の命をいただく体験とそれを補完する指導・援助(言葉がけ)によって、子どもは「命をいただいて食べているということ」をとらえることができていると感じている保育士の発言が抽出できた。保育の現場では、食を通した生命尊重概念の萌芽・育成を図る体験やそれを支える保育観が環境として備わっていることが示唆される。

### 事例4

1-g	<p>(前略)身近に生きているものと食べるものとそれからいろいろな因果関係というのは生活の中である程度身につけているのではないのかなというふうに思っています、(中略)現地の方のご厚意で鶏を春に絞めて、秋に鯉を捌いて、食べるとか、状況によってマムシを食べることがあったりとか、カエルを食べさせてもらったりとか、基本的には〇〇ではそうやって動物、昆虫でもなんでも遊んで死なせたとしても現地の方が「おまえたちが食わなければいけないんだぞ」という形で教えてくれたり、春は野草、タラの芽やワラビであったりとかを食材にして食べたり、秋はアケビだとか山梨であるとか、<u>自然のなかから命もそうだし食べものもそれとつながってるということが分かっているのかなと。一番大きいのは、鶏を捌いて食べるときに、本当に今まで目の前で今まで生きていたものが、やっぱり自分たちが食べるために殺していただくというところは子どもストンと入るところで、いただきますということが命をいただ</u></p>
-----	---

	きますということがスッと分かるんだな、ということは感じます。(後略)。
2-c	下の畑で年長児が野菜を作っているんですけれどもそれを見に行ったりとか、その成長過程を見させてもらって「大きくなってね」とか、こう色が変わって行って「食べられるのはいつかね」とかっていうのを一緒に楽しみに待っていて、年長児さんがとってきてくれると、「見た野菜が給食にはいつかね」とかって言うんで、そこからこう苦手な子でも、野菜が少し、自分が見たものを食べられたりっていうので、そういうような関わりはしています。
2-d	(前略)子どもたちと一緒に食べながら食のことについて「今日はこれがいってるよ、この野菜がいってるよ」なんていうのをお話として投げかけたり、畑でとれた野菜を調理にいられて、「畑でとれたお野菜をいれてるんだよ」とかって言ったり、あとはその食べものが目の前に来るまでには、畑でいるんな人が作ってくれてその段階でここまでになっているので感謝する気持ちを大切にしていうことで、いただきます、ごちそうさまっていう中にも、一応感謝してみたいな感じで食育を進めるような形にして、あとお魚解体で解体ショーをしてもらったり、その中で命の大切さっていうことで、絵本を通して一応子どもたちに伝えたり、本物を見せて子どもたちに、命をいただいて自分たちも生きているんだよっていうのを伝えたくて。

β群における事例を事例5に示す。事例5から、小学校では、食の意味や大切さ、命のつながりについて、教科等（家庭科、理科、道徳）の学習の一部として扱っていることがうかがえる。そこで、教師3-fは、食と動植物の生命についてのつながりをとらえさせるには意図的に教師が働きかける必要があると感じている。そうした働きかけに、ゲストティーチャーや絵本を活用して学習と食を関連付ける工夫があることが分かる（3-b、3-d）。また、教師の食に対する指導観・教育観で食の意味をとらえさせる場面があることも分かる（3-g）。α群と比較すると、小学校は学習指導のウェイトが大きく、食を通した生命尊重概念の萌芽・育成を図る環境はあまり整備されていないことが示唆される。そのため、「教師の働きかけ」の視点が重要になると感じている（3-f）。そこで新たに食と生命をつなげる体験活動や学習活動をいれていくには、抵抗感が生じると考えられる。これは、事例6の教師4-fの発言からもうかがえる。小学校では、生命のつながりが食と関連する学習は、各教科等で断片的な扱いになっている。そこで、抵抗感が生じることを踏まえると、食と生命尊重の関連という視点では、各教科等の総合的なアプローチ、つまり総合的な学習における探究学習の中に位置付けていくことを検討する必要があると考える。その際、指導の留意点として「教師の働きかけ」が明確に見えるように提案していくことも検討していく必要があると考える。

### 事例5

3-b	道徳で牛を見に行った時に、低学年でゲストティーチャーで、「いただきます」の意味とかやった。いただいている命みたいな。
3-d	絵本か何かになかったでしたっけ？いただきます。いただいている命とか。なんかそんなの、ありましたよね。絵本なんかで読み聞かせたことがある。比較的、低学年とかそうですね。
3-g	道徳とか授業ではなく、あまりにも気合が入っていない「いただきます」をしてたら、「なんで気合入っていないんだよ、ちゃんと挨拶しろ」というように指導の中で、これ作ってくれた人・・・というように蘊蓄しますよね。高学年でも話をしますよ。いちいち絵本とか持ってきてとかではなくてね。生徒指導の中で、私はしていました。
3-f	わたしの学年では、家庭科で食の大切さとか、社会でお米の作りやったり、また6年生では食べ物は最終的には植物になってるとか。いろんな教科の中で食に対する意識とか大切さを指導している

	が、給食の時間にどうつながっているかというつながっている意識はないし、なんとなくそれはそれで、今お話を聞いて振り返ってみると単発的で子どももたぶんそれは大事、それも大事と言うけれども、じゃあ今、口に入れようとしているいただくものがそこにどうかかわっているかということはこちらから働きかけがないと、逆に言えば働きかけがあればなんらかの気持ちがあがるというか感じる子どもでてくるかなどいうのも感じ、自分たちが繋げていかないと学習が給食指導につながらない。単発で時間内に食べることきれいに片づけて次の活動に入るために時間内にというのがすごく大きくなっている。
--	--

### 事例 6

4-f	〇〇の〇〇小というところでヤギを育てたりそれこそ鶏とか、それを見学しにいったことはあるんですが、やはりそういう取り組みをしている地方とかの情報はあるんですけど、じゃあ自分たちの学校でそれを本当にやるかってなると、相当なものが必要になっていて、こちらの構えも必要になってくるし、環境的なものもそうだし、この土日お休みということもあったり、できるのかっていうこと事態すごく難しい環境にあると思うので、その中でなかなか難しいこともあるよなっていうのは実感として・・・。
-----	---

### (3) 観点③についての結果と考察

α群における事例を事例7に示す。事例7から、他の食べ物と比較して、「乳」を活用する視点が見いだせないでいることがうかがえる。「乳」を体験活動に導入するとしても、生命との関連、生命尊重の萌芽・育成を図る方略としての価値が見いだせないでいる(2-e)。これは、(1)や(2)の事例からも分かるように、他の体験的活動により十分に生命尊重概念の萌芽が図れているという実態も関係していると考えられる。このことで、「乳」の活用への積極性はあまり見られない。逆を言えば、「乳」の活用は、現場サイドでは新たな視点になり得る。意義やプログラムの価値を提案するにより、生命尊重概念の萌芽・育成に関する現場の指導・援助を拡大することが期待できる(1-g、2-e)。

### 事例 7

1-g	牛の乳から牛乳ができていたということがどれだけ結びついているのかなというのと、とても大きな疑問ですね。子どもの様子を見ててもそうだし、話にもあがらないです。そういう意味では、何かアプローチがあるとまた食の世界が広がるのかなと
2-h	あまり意識して牛乳は牛さんのお乳だよって話をしたことがないかなって、今振り返ると。ただ、牛乳嫌いの子が結構いて、あの、年長さんなんかの女の子でも、本当にちょっとしか飲めない子がいて、そんなときに牛さんのお乳で栄養がいっぱいあってって話をして、すごく骨も丈夫になるしね、って話をしたことはあるかなと思うけど、あんまり「牛のお乳なんだよ、これは」って感じで子どもたちに提供したことはないかなって感じはします。
2-e	実際に体験することで、牛乳は牛の乳からできるものっていうのはすごく理解が深まるとは思うんですけど、それに対して生命尊重かっていうと、そこまでは発展しないのかなって思います。自分がとって、僕が取ったからおおいしくできたとか、自分の中の世界観で、この牛の命を分けてもらってるっていう発想にはまだならないのかなと。でも取り入れることで、伝える機会はかなり増えるのかなって思います。

β群における事例を事例8に示す。事例8から、小学校の実情として「乳」を学習教材として活用する余地があまりないことがうかがえる(4-c)。これは、生命尊重に関してはすでに道德の位置づけが明確であるからであろう。したがって、「乳」活用の意義を共有できるよう提案することが求められる。教師に活用の意義を尋ねたところ、教師3-gや教師3-bは、「子どもへの愛情」、「命をつなぐための食」に意義を見いだしている。また、教師3-bは「母乳との関連」にも価値を見いだし、それを思考・考察させる「概念化」という指導方略も描き出している。

## 事例 8

4-c	<p>生命尊重概念を育成するっていうのがねらいだったら、恐らくないっていうのは乳を使うよりももっと有効なものがたくさんあるから、限られた時間の中でやるにはわざわざ乳を選ばなくてもっていうことで今まで進んできてると思うんですけど、今回の例えば食育との関連で乳が使えないかっていうところであればまたちょっと視点が変わってくるのかなって思うんですけど、<u>生命尊重概念を育成するっていうのがねらいであるとする、わざわざ乳を取り上げなくてもっていうのが小学校の場合はあるのかなって。</u></p>
3-g	<p>〇〇〇〇〇っていうテレビがあるの知っていますか？この間、〇〇が酪農の〇〇やったんですよ。(中略)感動したことが2つあって、「酪農って命と向き合う仕事だ。子どもを産むことによって牛乳が出るし、子どもの為に作った牛乳を我々が加工しているというのが大前提。牛の子どもにたいする愛情って言うのをすごく感じるんだよね」っていうことを言っていたんですよ。おー、これ生命尊重かなあ。子どもができないとできないんだな。(中略)感動しちゃったんですよ。</p>
3-b	<p>私がふと思ったのは、10ヶ月あかちゃんがお腹にいるけど、出てきてからは食べられないから母乳じゃないですか。けど、母乳をずっと飲むんじゃなくて、母乳から離れていくけど、私たちは乳を飲む。<u>何を飲んでいるかっていうと牛乳だったりっていうのにつなげていくのもおもしろいんじゃないかなって</u>いう風に思いました。生まれるまではお腹で育っているけど、出てきてからは母乳だけど、ずっと母乳を飲んでいるわけじゃなくてそこから離れる時があるけど違う乳を飲むっていうところを考えさせると子どももあーそう言えばっていうようにつながるかなと思います。やっぱり命ですかね。命をつなぐ為に母乳を飲んでいるわけですし、命をつなぐ為にいろんなものを食べている中でその、牛からの乳を受けて私たちは命をつなげるところかなと。</p>

### (4)生命尊重概念の萌芽・育成を図る「乳」を活用したプログラム開発に向けて

現状、生命尊重概念の萌芽・育成を図る「乳」の活用については、現場サイドには新たな視点である。そこで、(1)、(3)で確認できた「乳」活用の意義を生かし、(1)、(2)、(3)で抽出できたプログラム開発の視点を取り入れ、「生きて働く力」になるという状況主義的な学習価値として現場サイドがとらえられるプログラムが必要となる。このプログラムの提案できれば、生命尊重概念の萌芽・育成に関する現場の指導・援助を拡大することが期待できる。

プログラム開発の視点として本調査から抽出できた点を構造化すると、「体験活動」から「振り返り(省察)」、「振り返り(省察)」から「概念化」、「概念化」から「実践」としたプログラム(サイクル)モデルが考えられる。実際の保育・教育の場でどのように具現化していくのか、また、その具現化には、乳幼児期と学童期のそれぞれの場のカリキュラムの段差の考慮が必要となる。

## VI. 研究組織

### 1) 代表研究者

東京家政学院大学 准教授 酒井 治子

### 2) 共同研究者

白梅学園大学 教授 無藤 隆

白梅学園大学 准教授 林 薫

群馬大学 准教授 栗原 淳一